

週日の説教

金 大烈 神父 2009年7月7日(火)

《感謝しましょう！！》

今日は、20年くらい前に出会った、あるハンセン病のおじさんの話を皆さんと分かち合いたいと思います。

20年前、ハンセン病の人々が集まって住んでいる施設がありました。そこで、60歳半ばくらいのルカという名の患者と個人的にかかわりを持ちました。彼は、13歳で発病し、60歳を過ぎるまでずっとハンセン病患者として生きてきた人です。彼は、ハンセン病にかかってからある施設に入り、そこで洗礼を受けました。とても熱心に信仰の生活をする方でした。彼の指は、親指1本を残し、9本の指は全てなくなってしまったのですが、手の平だけでロザリオを繰りながら、毎日ロザリオを捧げる方でした。私は、彼といろいろ話しをしました。聞きたいこともたくさんあったのですが、彼の状態を見ると、聞きにくかったです。

ある日、マッコリという酒を二人で飲み交わしながら、「ルカおじさん、今はどんな気持ちですか。カトリック信者になって長い時間が経ちましたが、神様に対しての恨みとか、悔しい気持ちはないのでしょうか。」と聞いてみました。彼は、その場では、答えてくれませんでした。そして次の日、彼の世話をする看護師さんの手を借りて手紙を書き、私に送ってくれました。私はその手紙を読んで、自分にもものすごく恥を感じました。

手紙の内容は、『あなたと話し合ってから振り返ってみました、どんなに考えても私の結論はただ一つです。振り返ってみたら、全てが恵みでした。』というものでした。私たちは、この世の中で、なかなか感謝の生活をしにくいですよ。何でもないことで、怒ったり、人を踏みつけたり、がっかりしたり、恨みを感じたりして生きています。それなのに、彼は 全て恵みだった と言っています。病気にかかって、いろいろな人々の冷たい視線の中で生きてきて、ある日信者になった彼。たぶんその時、彼は簡単には答えたくなかったのでしょうね。そこで、自分の部屋に戻ってから、翌朝、看護師さんと呼んで頼んで書いてもらったのでしょう。「どんなに振り返ってみても、全ては恵みでした。」その言葉を聞くと、私たちは自然に頭が下がるのではないのでしょうか。

結局、信仰というのは感謝の心ですよ。いただいた恵みを感じられなければ、感謝の心は絶対にできません。感謝の心ができなければ、無理やり喜びの顔をしてもそれは嘘になります。まことの喜びを体験できないでしょう。皆様、この方でなくても、恥を感じさせるような立派な生き方をされる人々はいます。その人々の共通点は、ふつうの条件の中で生きている人ではない、ということです。私たちならば、死んでしまうほうがよいのではないかと思えるくらい、不幸な生き方をしている人々です。しかし、その人々の生き方、汚れのない純粋な心や靈魂を見ますと、本当に恥を感じます。

皆様、条件の問題ではありません。環境の問題でもありません。身体が、精神が、不自由であっても、もし私たちが本当に心を開いて願えば、その「恵み」を悟ることができるのではないかと思います。皆様も、今までの一生をよく振り返ってみてください。よく考えてみれば、神様が、イエス様が、私たちをここまで導いてくださったことがお分かりになると思います。そのような悟りの生活が、私たちにとって何よりも必要な信仰の生活になるのではないかと思います。

感謝しましょう。

ありがとうございました。